

稲むらの火



「これは、ただ事ではない。」

とつぶやきながら、五兵衛は家から出てきた。今の地震は、別に烈しいというほどのものではなかった。しかし、長くゆったりとしたゆれ方と、うなるような地鳴りは、年をとった五兵衛にとっても、今までに経験したことのない不気味なものであった。

五兵衛は、自分の家の庭から、心配そうに下の村を見下ろした。村では、豊年を祝う宵祭りのしたくに夢中で、さっきの地震にはまったく気がつかないようである。村から海に移した五兵衛の目は、たちまちそこに吸いつけられてしまった。風とは反対に波が沖へ沖へと動いて、見る見る海岸には、広い砂原や黒い岩底が現れてきた。

「大変だ。津波がやって来るに違いない。」と、五兵衛は思った。このままにしておいたら、四百の命が、村もろともひとのみにやられてしまう。もう一刻も猶予はできない。

「よし。」

と叫んで、家かけ込んだ五兵衛は、大きな松明を持って飛び出してきた。そこには、刈り取ったばかりのたくさんの稲たばが積んである。

「もったいないが、これで村中の命が救えるのだ。」と五兵衛は、いきなりその稲むらのひとつに火を移した。風にあおられて、火の手がぱっとあがった。ひとつまたひとつ、五兵衛は夢中で走った。こうし、自分の田のすべての稲むらに火をつけてしまうと、松明を捨てた。まるで失神したように、彼はそこに突っ立たまま、沖のほうを眺めていた。

日はすでに沈んで、あたりがだんだん薄暗くなってきた。稲むらの火は天をこがした。山寺では、この火を見て早鐘をつきだした。

「火事だ。庄屋さんの家だ。」と、村の若いものは、急いで山手へかけ出した。続いて、老人も、女も、子どもも、若者の後を追うようにつけ出した。高台から見下ろしている五兵衛の目には、それが蟻の歩みの「ように、もどかしく思われた。やっと二十人ほどの

若者が、かけ上がって来た。彼らは、すぐ火を消しにかかろうとする。五兵衛は大声で言った。

「ほおっておけ。大変だ。村中の人に来てもらうんだ。」

村中の人、次から次へと集まって来た。五兵衛は、後から後から上がってくる^{ろうにやくなんによ}老若男女をひとりひとり数えた。集まって来た人々は、燃えている稲むらと五兵衛の顔とを、かわるがわる見くらべた。

そのとき、五兵衛は力いっぱいので叫んだ。

「見ろ、やって来たぞ。」

たそがれの薄明かりをすかして、五兵衛の指さす方をそこにいる人々だれもが見た。遠く海の端に、細く暗い一筋の線が見えた。その線はみるみる太くなった、広くなった。非常な速さで押し寄せて来た。

「津波だ。」

と誰かが叫んだ。海水が、絶壁のように目の前に迫ったと思うと、山がのしかかってくるような重さと、百雷が一度に落ちたようなとどろきをもって、陸にぶつかった。人々は、我を忘れて後ろへ飛びのいた。雲のように山手へと突進してきた水煙のほかは、一時何も見えなかった。

人々は、自分らの村の上を荒れ狂って通る白く恐ろしい海をみた。二度三度、村の上を海は進みまた退いた。

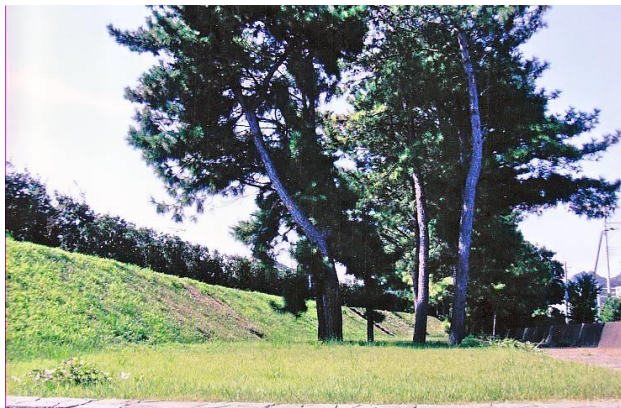
高台では、しばらく何の話し声もなかった。村人は、波にえぐり取られてあとかたもなくなった村を、ただあつけにとられて見下ろしていた。

稲むらの火は、風にあおられてまた燃え上がり、夕やみに包まれたあたりを明るくした。はじめて我にかえった村人は、この火によって救われたのだと気がつく、無言のまま五兵衛の前にひざまづいてしまった。

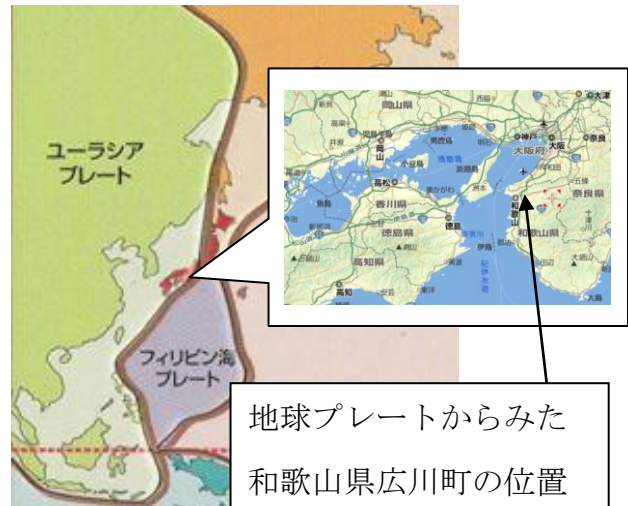
「稲むらの火」により津波から住民を救った五兵衛、後の名、浜口梧陵（1820～1885）は津波のあと、その復興に全力をつくした。避難した住民のための炊き出しをしたり、50戸の家を建て貧しい人に無料で提供したりした。

特に、梧陵は、自分が資金を出し、多くの人と協力して、津波から村を守る大堤防を作った。その広村堤防は、高さ4.5メートル、幅20メートル、長さ670メートルで4年をかけて完成させた。

この堤防のお陰で、その後何回かおそった津波の被害を少なくすることができた。



広川堤防



地球プレートからみた
和歌山県広川町の位置

東日本大震災から5ヶ月が過ぎた平成23年8月、和歌山の広川町をたずねた。町役場の前は「稲むらの火」広場となっており、中央の台座にたいまつを火をかざす五兵衛の銅像があった。

この広場では、毎年11月3日、梧陵の偉業をたたえる「津浪祭」が開かれるという説明を聞いた。

そのあと、国指史跡となっている広村堤防や浜口梧陵記念館、津波防災教育センター、浜口梧陵の銅像のある耐久中学校を見て回った。

「高台への避難」の大きな看板が目につくなど町全体が、浜口梧陵の心を受け継いだ「津波防災の町」という印象であった。

参考にさせていただいた資料	
浜口梧陵の生涯	和歌山県広川町作
浜口梧陵小傳	和歌山県広川町作
小學国語讀本	文部省
参考にさせていただいた本	
燃えよ 稲むらの火	桜井信夫作 PHP 研究所